

結局、雪の氣遣いが無くなる二月の末まで難波にとどまった。毎日雪が降るわけではない。空模様を確かめながら歩けばそれほど心配する旅にはならないだろう、と思わなくもなかったが、何しろ六左衛門夫婦が温かかった。

あと一日、もう一日と引き止められて、気が付けば梅の季節がとつくに終わっていた。この屋の中庭にも利之助との思い出の木、わび助が一本あった。

この木が花を終えた時にはいとまを、と決めていたのに、あと一日、もう一日が積み重なって、とうとう今日まで延び延びになってしまった。草鞋の紐を結んでいる傍でセキに「今度いつ来てくれはる？」と問われてミチは困った。

美濃で傘狂の許しを貰えたらただちに芭蕉の足あとを追う旅に出るつもりでいる。その旅がどれほどの日数が必要とするのか、まるで見当がつかない。

それよりも、はたして傘狂がすんなりと許しをくれるのかどうか、それさえ定かではない。

「成し遂げたい旅があります。その旅を成就させ、故郷へ帰る途中には必ず寄らせていただきます。お約束します。だけどそれが一体いつになるのか、一年先なのか三年先なのか、今の私には全く予想が出来ません」そう言いながらミチは、全くの偶然がもたらした出会いが、こんなにも氣持ちの通い合った月日になるうとは、と難波で過ごした三月余り

を心の底からいとおしく思った。

立ち上がって、挨拶をしようと六左衛門を振り返ったミチをセキが抱きしめた。

「泣いたらあかん。泣いたらあかん。判ってるんよ。だけど涙が勝手に出て来る。かんにんな。ほんまに、ほんまに帰ってきてな」

六左衛門は帳場に座ったまま、平静を装っている様子だった。だが、目が宙を泳いでいた。立ち上がってミチの傍に行きたいのだが、不覚を取りそうで立ち上がれなかった。

「私はずっと待つてるさかい、必ず帰ってきなさいよ」と言っただけから視線を外した。喉元まで込み上げてきた嗚咽をはぐらかすのがやっとなかった。

報恩講以来三月振りに京に入ったミチは、三条大橋西詰の高札場の前に立った。

高札を見上げ大橋の向こう岸に目をやると、難波でぬくぬくと過ごした月日にやっとな決まりをつけ、一気に旅心が定まった気がした。今日の内に近江に入ろう。

石山から琵琶湖の南岸をかすめて草津の宿に入った。この宿場で東海道と中山道が合流する。

見通せないほど、通りのずっと先まで人家や商店、旅籠がぎっしりと並んでいた。

人と馬と荷車がひきもきらず行き交う。その所為か、乾いた道から砂ぼこりが舞い上がって、時折吹く強い風に運ばれて目に痛い。通りを行

く人達が、袂で顔を隠すように歩いているのは、砂埃を嫌ってのことだ
った。

追分の前にたたずむと、先ず東海道側を透かして見た。この道をゆけ
ば江戸に着く。

まだ見たこともない江戸の様子をあれこれと思い描き、いずれは日本
橋を渡る日を想像して、ミチは思いがけず胸が昂ぶるのを感じた。

それも、昨夜石山寺の宿坊で、たまたま隣り合わせた旅の僧から聞い
た江戸の話が、ミチの好奇心を掻き立てたからだ。

その当時の江戸の俳諧事情は、松永貞徳の貞門派や、その後には時代を
作った談林派が一服する中、芭蕉が主導する蕉風俳諧が新しい風となっ
ていた。

僧は、そのような事情を脇に置いておいて面白い男が居る、と話した。
名を一茶と言った。初めて聞く名だった。

「信濃の出らしいが、何でも子供の頃に故郷を出され江戸でえらく苦
労をしたらしい。その事が下敷きになっているのか、句が非常に平明で
親しめる。

『初夢に古郷を見て涙かな』などどうですか？と言い、ミチを見た。

江戸という、とてつもなく大きな町に群れ成す、遭った事も無い才人
達の風貌を想像しながら、ミチは一日も早く傘狂の許しをもらわねば、
と思った。